



日本植物病理学会ニュース 第49号

(2010年2月)

【今後の学会活動予定】

1. 平成22年度大会開催予定

日時：平成22年4月18日（日）～20日（火）

場所：国立京都国際会館（京都市左京区宝ヶ池）

大会HPサイト：<http://www.knt.co.jp/ec/2010/ppsj/>

連絡先：平成22年度日本植物病理学会大会事務局

〒606-8502 京都市左京区北白川追分町

京都大学大学院農学研究科応用生物科学専攻
植物病理学研究室

TEL：075-753-6132（三瀬和之），

075-753-6131（奥野哲郎）

FAX：075-753-6131

Eメール：psjh22tk@kais.kyoto-u.ac.jp

【本学会活動状況】

1. 第1回日韓植物病理学会合同シンポジウム開催報告

第1回日韓植物病理学会合同シンポジウムが、昨年度に韓国植物病理学会との間で締結された交流協定にもとづき、平成21年10月28日から31日の4日間にわたり韓国チェジュ市のJeju KAL Hotelで開催された。日本側からの参加者数は99名、韓国側の参加者数は約300名であった。シンポジウムではプレナリーレクチャー、MPMI, Biological control, Chemical controlの各セッションが設けられ、日本側から15名、韓国側から17名の計32名による講演者による講演が行われ、活発な質疑討論がなされた。また、ポスターセッションも行われ、日本側からも64件のポスターが発表された。2日目の夕刻にはバンケットが催され、韓国の民族音楽と舞踊を楽しみ、その後日本と韓国の学生によるカラオケコンテストが行われ、両国植物病理学会の友好を深めた。最終日には優秀ポスター賞の発表が行われ、日本側からは5名が受賞した。第1回となる日韓合同シンポジウムに多くの方々に参加をいただき、両国植物病理学会の学术交流として意義深いシンポジウムとなりました。韓国植物病理学会のSeung Hun Yu会長をはじめ組織

委員会と関係者の皆様、御寄付を頂いた日本FRACメンバーの各社ならびに日本から参加頂いた会員の皆様に深謝いたします。（日韓合同シンポジウム日本側組織委員会）

2. 部会開催報告

(1) 北海道部会

平成21年度日本植物病理学会北海道部会は10月15日、16日の2日間にわたり、札幌市の北海道大学で開催された。参加者は約100名であった。15日は第209回談話会が開催され、「北海道のイネいもち病を考える」のテーマで行われた。演者は4名で、(財)岩手生物工学研究センター 寺内良平氏による「Association geneticsによるイネいもち病菌相互作用の解析」、北海道大学大学院農学研究科 犬飼剛氏による「オオムギいもち病抵抗性の遺伝」、北海道立上川農業試験場 小倉玲奈氏による「北海道におけるイネいもち病の伝染源と発生対応型防除」、北海三共株式会社 佐々木正人氏による「北海道におけるイネいもち病防除の現状」の講演があり、活発な議論が行われた。

16日は研究発表会および総会が開催された。講演はウイルス・ウイロイド病、細菌病、糸状菌病合計19題で、活発な質疑応答が行われた。総会では庶務報告・会計報告等が行われ提案通り承認された。（眞岡哲夫）

(2) 関西部会

平成21年度日本植物病理学会関西部会は、10月17日、18日の2日間、神戸大学農学部で開催された。参加者数は205名であった。本年度関西部会では、春の大会でポスター発表が再導入されたことを鑑み、ポスター発表も受け付けることとした。当初はポスター発表の希望者が少ないのではないかと懸念もあったが、実際には、予定していたポスター会場のキャパシティを超える数のポスター発表申込みがあった。調整の結果、最終的な発表題数は、口頭発表57題、ポスター発表30題となった。口頭発表は農学部校舎の3会場、ポスター発表は神戸大学瀧川会館の大会議室で、それぞれ2日間に分けて催され、活発な発表・質疑応答が行われた。とくにポスター発表会場の熱気は予

想以上で、ポスターの良さが見直されてきているという感を深くした。

1日目の夕方には、大阪湾を一望できる瀧川会館食堂で、懇親会が催された。夜景を背景に、神戸大学発ブランド純米大吟醸酒「神戸の香」等を味わいながら、大いに親睦が深められた。

なお、初日の役員会ならびに総会において、次期会長として京都大学大学院農学研究科奥野哲郎氏が選出・承認された。平成22年度の関西部会は福井県立大学で開催される予定である。(土佐幸雄)

(3) 九州部会

平成21年度の日本植物病理学会九州部会は、九州病害虫研究会との共催で、11月9日、10日の2日間にわたり、グランデはがくれ(佐賀市)を会場に、約100名の参加者で開催された。講演数は26題で、内訳は細菌病関係8題、菌類病関係12題、ウイルス病関係6題で熱心な討議が行われた。昼食時に開催された幹事会で、役員交代、次年度の開催計画、平成24年度の日本植物病理学会大会開催地等について審議された。また、これらの他に、次年度九州地区担当予定の談話会や研究会の紹介があった。その結果、平成22年度の部会は宮崎県で開催されること、平成24年度大会は、福岡市にて、土屋健一氏(九州大学)を委員長として開催される旨が了承された。また、22年度は、感染生理談話会(開催地代表 大島一里氏)が8月18～20日に佐賀県唐津市で開催されること、さらに植物病害診断研究会(代表 大貫正俊氏)が開催される予定で日程と開催地が調整中であることが紹介された。これら幹事会での審議はその後に開催された総会にて報告、了承された。2日目には第34回九州部会シンポジウムが開催され、長崎県農林技術開発センターの小川哲治氏による「ジャガイモ塊茎えそ病の発生生態と防除」、九州大学大学院農学研究院の黒瀬大介氏による「植物病原菌を用いた外来性侵入雑草の伝統的生物防除」、ならびに農研機構九州沖縄農業研究センターの吉田めぐみ氏による「麦類赤かび病におけるかび毒蓄積特性および防除適期に関する研究」の3つの話題提供があり、活発な議論が行われた。(岩井 久)

3. 研究会・談話会開催報告

(1) 第3回植物病害診断研究会

第3回植物病害診断研究会は、平成21年10月14日、札幌市の札幌全日空ホテルで開催された。開催地の北海道は国内最大の農業生産地であることから、参加者は試験研究機関、大学、普及機関、農業団体、企業など多岐にわたり、遠くは宮崎からの参加者もあり総勢100名を超えた。講演に先立ち「はじめに」と題して難波成任氏(東京大学

大学院)より、近年携わってこられたプラムポックスウイルスの緊急調査を例に、病害診断の重要性と研究会の経緯を紹介頂いた。次に、「分類と診断」のセクションに移り、奈良部 孝氏(農研機構北海道農業研究センター)に「植物寄生性線虫の分類とプラスチックカップを用いたジャガイモシストセンチュウの簡易検出・密度推定法」と題して講演をして頂いた。

「診断手法の開発」のセクションでは、植原健人氏(農研機構北海道農業研究センター)に「ジャガイモシストセンチュウと近縁種を識別する遺伝子診断法」、杉山俊平氏(北海道大学農学院)に「マクロアレイとマイクロチューブハイブリダイゼーションを用いた重複感染ウイルスの簡易高感度検出法」と題して講演を頂いた。

続く特別講演では、「病害診断と社会はどう結びつくか」と題し、築尾嘉章氏(農研機構花き研究所)「花き病害図鑑の作成とウェブサイトでの公開」、佐藤仁敏氏(ISTA・種苗管理センター)「公的機関で対価を得て病害を診断(検査)する仕組み」の講演を頂いた。

例年好評となっている講演の最後のセクション、「診断の困難な病害に出会ったとき」では、開催地で精力的に活動しておられる2氏、三澤知央氏(北海道立道南農業試験場)、新村昭憲氏(北海道立中央農業試験場)にそれぞれ「北海道の事例Ⅰネギ葉枯病」、「北海道の事例Ⅱ北海道における細菌の一種によるカボチャの突起果症状の発生」と題して研究を紹介して頂いた。

「パネルディスカッション」では、牧野孝宏氏(光産業創成大学院大学)の名采配で短い時間ながら演者一同の講演から重要なポイントをかいつまんで検討することができた。最後に眞岡哲夫(農研機構北海道農業研究センター)より例年実施されているアンケートの結果について報告があった。

植物病理学会の新しい研究会として産声を上げた植物病害診断研究会も3回の開催を重ね、会としての方向性が定まってきた。アンケートでは毎回現場の研究者から、会への熱い期待と同時に、現場で直面する問題をさらに実践的な形で扱って欲しいという声も多く寄せられる。研究会がこれらの声に的確に応え、参加者の悩みに役立てるよう、今後も努力していきたい。

なお、第4回研究会は、九州で開催される予定である。

(眞岡哲夫)

(2) 第25回細菌病談話会報告

第25回植物細菌病談話会は、平成21年11月26日および27日に、静岡市の静岡県男女共同参画センター「あざれあ」において開催された。当日は参加者61名であった。

北海道から沖縄まで各地の試験場研究員、普及員、企業研究者、大学教員、学生、一般参加者など比較的少人数の割に多様な人々が出席して下さった。

26日13時30分より開催地委員長の露無慎二氏のあいさつに引き続き、第1部の座長を井上康宏氏にお願いし、「カンキツかいよう病の発病に伴う細胞内の分子変化」という演題で平田久笑氏（静岡大学）、「タイプIII分泌機構を介したイネー白葉枯病菌間相互作用の解析」という演題で古谷綾子氏（農業生物資源研究所）の発表をいただいた。お二人は分子レベルで病原性の解析を行う若手のトップ的な存在で、それまでも多くの学会発表などで内容はある程度周知されていたが、研究の全体像と展望が見据えられたすばらしい発表であり、質疑応答も活発に行われた。休憩ののち、10分ほどの時間であったが、瀧川の司会によりフリーディスカッションタイムが設けられ、「病名目録と植物病原細菌の新規学名について」と題して病名目録追録の作成とその時点で問題となってきた新学名の取扱いについて意見交換がなされた。この件に関しては残念ながらあまり活発な意見は出ず、病名委員会にお任せするといった雰囲気の流れた。その後、15時35分から第2部を瀧川の座長のもとで行い、「セイヨウナシに発生した新規細菌病について」という演題で松浦貴之氏（横浜植物防疫所）、「ブドウ根頭がんしゅ病菌の系統と生物防除に関する研究」という演題で川口章氏（岡山県農業総合センター）の発表をいただいた。どちらも現場で発生する細菌病の課題にとりくまれる若手の気鋭の研究者の発表で、各地の試験場の研究者などとの間で活発な質疑応答がなされた。どこで発生するかもしれない危険性があり、また同様の新病害への対応について指針を与えるものとして注目が集まったと思われた。

26日の講演のあとの世話人の集まりで、次の開催地は2年後に九州大学の土屋健一氏にお願いすること、これからは学会本部との連絡等のために代表者を置くこととし、今回の開催地の準備担当者が次の開催日まで代表を務めることにし、これから2年間は瀧川が担当することを決定した。

17時30分より、あざれあ6階小ホールにおいて懇親会が開催された。出席者51名と参加者の大半が懇親会にも出席していただき、昼に尽くせなかったディスカッションや旧交を温める会話が活発になされて大いに盛り上がった。その後の2次会もあちこちで盛り上がったようである。

27日には9時30分より第3部を澤田宏之氏の座長のもとで行い、「大量オーソログを用いた系統解析法の開発」という演題で堀池徳祐氏（静岡大学）、「ゲノム情報を活用

してファイトプラズマの病原性メカニズムを探る」という演題で大島研郎氏（東京大学）のご発表をいただいた。堀池氏はインフォマティクスの専門家として広く生物の系統解析を行う専門家として静大に赴任された研究者で、今回はいわばゲストスピーカーの立場であったが、新たな真核生物の起源論や系統解析の問題点等を示していただき、普段認識できていない大きなストーリーに驚くとともに、実際の解析テクニックなどについても多くの質疑があった。大島氏はもちろんファイトプラズマのゲノム解析で有名であるが、美しいスライドとともに代謝系についてや媒介虫との関連、病徴発現因子など研究の方向の全体像が容易に理解できる発表であり、感心の声があちこちで聞かれた。11時20分より土屋健一氏を座長に第4部として「青枯病菌のグローバルな感染戦略と宿主の応答」と題して曳地康史氏（高知大学）による発表をいただいた。青枯病研究の最前線について分類から宿主相互作用まで広いスペクトラムでまとめていただき、これまた感嘆の声があがるとともに多くの質疑もあって大変勉強になった。12時10分には無事に閉会した。

最後に開催の通知が学会報に掲載されそこの手違いをおこし、ホームページなどで掲示していただいたものの、連絡不十分によって参加の機会を逃された会員がいらっしまったかと思われる。この点については深くお詫びするとともに反省点として今後の同様な会の開催に活かしたい。会の運営に当たっては平田久笑氏の奮迅の活躍と静岡大学の学生諸君のご協力をいただいた。ここに記して感謝したい。

（瀧川雄一）

【技術士対応委員会からのお知らせ】

1. 学生・院生諸氏への「技術士補」資格取得のお勧め

平成16年4月1日、技術士（農業部門・植物保護）〔国家資格〕が誕生しました。これに対応して日本植物病理学会では技術士対応委員会を設置し、技術士試験の受験を奨励するとともに、技術士（農業部門・植物保護）の社会での活躍を促進するための活動に積極的に取り組んできました。

技術士試験は2段階で、第一次試験に合格すれば「技術士補」の資格が得られ、その後4年間の実務経験を積みば第二次試験の受験資格者となり、これに合格すると技術士の資格が得られます。この4年間の実務経験には大学院在学歴の2年間も算入されます。第一次試験の受験資格には何の制限もなく、学生・院生でも受験できます。受験科目は基礎科目、適性科目、共通科目（数学、物理学、化学、生物学、地学の中から2科目を選択。4年制大学の理科系の卒業者は免除）および専門科目（農業部門）です。第一

次試験は専門科目を除いて技術士の全部門（20部門）で共通問題ですので、第一次試験合格者は第二次試験を他の部門で受験することもできます。第一次試験は毎年6月の受験申込みで、10月に試験があります。

「技術士補」資格は国家資格ですので、例え、将来技術士にならなくても、在学中にこの資格を取得しておくことは就職活動などでも有利に働くことが期待されます。試験の難易度については、平成20年度に新設された私学のH大学生命科学部植物医科学専修の入学わずか半年後の新入生がその年度の技術士第一次試験に5名の合格者を出した例からもみられるように、過去問と最新版の食料・農業・農村白書をまじめに勉強しさえすれば、それほどの難関ではないことが分かります。

植物保護関係の大学の先生方にも、学生・院生諸氏に技術士第一次試験の受験を強く勧めただければ誠に幸いに存じます。なお、技術士試験に関する詳しい情報は学会のホームページならびに学会ニュース第46号（日植病報 Vol.75, No.2 2009）をご覧ください。

平成21年7月23日 日本植物病理学会技術士対応委員会
2. 技術士（農業部門・植物保護）の資質について

技術士育成推進委員会では以下のように、技術士（農業部門・植物保護）の資質について取りまとめましたのでお知らせします。

平成21年12月21日

技術士（農業部門・植物保護）の資質について

技術士育成推進委員会

（はじめに）

平成16年4月1日、技術士（農業部門・植物保護）が誕生した。それ以来、日本植物病理学会、日本応用動物昆虫学会、日本農薬学会、日本雑草学会、植物化学調節学会は委員会を設置し、技術士試験の受験奨励を行うとともに技術士（農業部門・植物保護）の社会での活躍の促進について積極的に取り組んできた。

技術士（農業部門・植物保護）が社会で活躍するに当たり、どのような知識、技術を有する必要があるのか具体的に検討し、以下のように取りまとめた。これらの事項を習得した技術士（農業部門・植物保護）が社会で活躍し貢献することを期待する。

（技術士の資質と責務）

- 食料、農業、農村に関する幅の広い知識
- 植物（作物・樹木等）の病害、虫害、雑草の診断や同定に関する知識と技術
- 病害、害虫、雑草の発生生態と防除に関する知識と技術
- 病害、害虫、雑草の総合防除等に関する知識と技術

- 農薬取締法、農薬登録のしくみ、農薬の安全性に関する知識

- 農薬の種類、作用機構に関する知識

- 農薬の使用方法に関する知識と技術

- 作物の栽培・生産・貯蔵に関する知識と技術

- 遺伝子組換え技術に関する知識

- 食品の安全に関する知識

- 環境保全に関する知識

- 日本技術士会が定めた技術士倫理要綱および技術士ビジョン21に記載されている技術士の倫理や役割・義務・責任の遵守。

（技術士育成推進委員会）

日本植物病理学会、日本応用動物昆虫学会、日本農薬学会、日本雑草学会、植物化学調節学会の5学会が設置した委員会である。

【種苗業界におけるレース・ストレイン規定に関する国際的な取り組み】

種苗業界の国際組織であるISF（International Seed Federation：国際種子連盟）において、品種の病害虫抵抗性を表記する時に用いる病害虫コードの統一を行っていることを本ニュース第33号（2006年2月）で紹介した。この作業は国際的な種子取引の主要国であるオランダ、フランス、米国、イスラエルと日本の5カ国各2名と、英国1名およびISF事務局員で構成する少人数のワーキンググループ（WG）ですすめており、日本からはサカタのタネの五十嵐充氏と私が日本種苗協会を代表して参加している。WGでは病害虫の学名を基にしたコード規定のガイドラインを作り、それに従ってこれまでに25作物の373病害虫のコードを決め、ISFのホームページ（http://www.worldseed.org/en-us/international_seed/pathogen_coding.html）で公開している。この病害虫コードは、ユーザーがそれぞれの品種の持っている病害虫抵抗性を知るための単なる記号だととらえていただければよいものである。

しかし、このコード規定の作業の中で、レース・ストレイン（以下単にレースとする）分化が起きている病害虫については対象レースを表記すること、そのためにレース判別表を規定することになった。病害虫抵抗性を表記していても、レースによっては発病する恐れがあることをユーザーに理解してもらっておく必要があるからである。この作業を始めてみると、レース判別表が同じ病害虫で複数あったり、国によって番号の付け方が違うというケースもあることがわかった。例えば、トマト萎凋病菌のレースは日本や米国では1,2,3であるが、欧州では0,1,2を使ってお

り、同じレースを指す番号がずれていることから、この両者を組み合わせた表記方法を現在検討している。WGではどの判別表、どのような表記がユーザーに有用であるかを判断し、場合によってはWGで手を入れてレース判別表を規定し、現在21病害の判別表をISFのホームページに載せている。興味のある方はご覧いただきたい。

WGでは米国植物病理学会（APS）に対してレース判別表についての投げかけを行い、APSとしてもレース判別表の標準化に取り組むことになった。APSでは「病原菌レース・ストrein命名に関するAPS-ISF暫定委員会」を設置し、今後ISFのWGが規定したレース判別表の評価を行うことになっている。

次に、レース規定に関するその他の動きについても紹介する。レース判別を行う場合に問題になるのがレース標準菌株と判別品種種子の確保である。オランダの品種登録・種苗検査を行う第三者機関であるNaktuinbouwでは、オランダ国内の種苗会社の資金および労力の協力の元、菌株と種子を保存、増殖、配布するシステムを運用している。特に、病原菌の維持に労力のかかる絶対寄生菌で、多数のレースが存在するレタスとハウレンソウのべと病菌でその力を発揮している。フランスでも品種登録・種苗検査を行う国の機関であるSNES-GEVESが中心になって、種苗会社とともに同様のシステムを運用中である。それらにならって米国でも、USDAと種苗会社で同様のシステムを作るべく、メロンつる割病菌とハウレンソウべと病菌を最初の候補として、検討を始めている。

なお、これらの取り組みについての詳細は、「植物防疫」2010年1月号に記事を掲載していただいたので、これをご参照ください。このうち、ISFのWGが規定を進めているレース判別表は種苗会社のユーザーだけでなく、植物病理学、育種学、園芸学などの分野の皆様にも関わることであり、これからも機会を見つけて情報を提供していきたい。

(タキイ種苗 塩見 寛)

【出版のお知らせ】

渡邊恒雄 著 “Pictorial Atlas of Soil and Seed Fungi” の第3版の出版について

1993年に“写真と図解 土壌糸状菌”をソフトサイエンス社から出版、それを翻訳し“Pictorial Atlas of Soil and Seed Fungi”として1994年にアメリカのCRC PRESS社の姉妹会社のLewis出版社から初版を、2002年にはその第2版を出版した。それから8年後となる2010年に、第3版の出版予定となった(参照 Amazon.com)。初版は約300種の土壌菌と種子汚染菌を纏めたが、第2版では、ダイオ

キシンやリグノセルロース分解菌研究の際に分離した多くの菌を加え、公的機関に寄託した使用菌株の一覧表を付録とした。第2版の菌の形態の線画は、アドビイラストレーターによるイラストだが、第3版では500種以上の菌の白黒写真を同じグループごとにまとめアルファベット順にまとめた。付録のCDRでは多数のカラー写真も含まれる。また菌のコロニー写真または乾燥標本をスキャナーで取り込み、これら菌をお互いに識別するための検索表や、各菌の産地、基質、公的機関への寄託先や採集法も書き入れた(日本菌学会ニュースレター2010-1(出版予定)の関連記事を参照されたい)。最近は遺伝子情報を元に菌の再分類が行われており、多くの異名が生まれ、絶えず変名の危機にある。本書では発表時に使用した学名を使用したが、各菌の形態写真は、生活環のごく一部をとったに過ぎないが、一目で誰にでも理解しやすく、菌の名前の如何を問わず菌そのものの理解を助けよう。(渡邊恒雄)

【学会ニュース編集委員コーナー】

本会ニュースは身近な関連情報を気軽に交換することを趣旨として発行されております。会員の各種出版物のご紹介、書評、会員の動静、学会運営に対するご意見、会員の関連学会における受賞、プロジェクトの紹介などの情報をお寄せいただきたくお願いします。

投稿宛先：〒170-8484 東京都豊島区駒込 1-43-11

日本植物防疫協会ビル内

学会ニュース編集委員会

FAX：03-3943-6086

または下記学会ニュース編集委員へ：

加来久敏、築尾嘉章、桑田 茂、植草秀敏、佐藤 衛
各委員宛

編集後記

新年おめでとうございます。学会ニュース第49号をお届けします。新年にあたり会員の皆様方のご健康とご発展を祈念いたします。本年も学会ニュースを宜しく願います。

さて、学会ニュース第49号ですが、学会活動の予定と活動報告が中心となっています。今年の大会は久しぶりの京都、また開催時期が若干後にずれて春たけなわの頃に開催されます。京都大学はじめ大会運営委員会の方々には大変お世話になります。活動報告では北海道、関西及び九州の各部会、それに研究会・談話会報告が続きますが、いずれも盛会裏に終わり、同慶の到りです。そして、

技術士対応委員会からの技術士の資格取得の案内ですが、すでに学会ニュース第46号で取り上げましたように、「技術士」は学会としても大きな課題で、今後植物保護に関係するすべての分野で非常に重要な資格になることは間違いなく、委員長・稲葉忠興氏のリーダーシップで社会的認知も進んでおり、合格者の数も増えていますが、まずは技術士100名誕生が目標です。この具体的な数字が一日でも早く達成できるように、とくに学生・院生諸氏へ準備をお願いしたいと思います。

学会の国際化やIF獲得など学会が抱えてきた大きな課題対応も着実に進んでおり、今年も学会員の叡智を結集して対処してゆきたいものです。 (加来久敏)
